

ザ・厄介な英単語

寺 秀幸

先生、*Osaka Station* にはどうして *the* がつかないんですか？

理論家の S 子が聞いてきた。彼女によると、普通、「固有名詞＋普通名詞」の表現では、*the Yamato River* や *the Kanto Plain* のように *the* がつくが、*Osaka Station* には *the* がついていないという。その理由が知りたいというのだ。

ううん、どう説明したらいいものだろう。冠詞に関心を持つとは感心ですねえ、などといながら時間を稼ぐ。

冠詞の指導は難しい。純粹に文法的な側面だけでなく、状況依存的な側面や慣用的側面も考慮しなければならない。考えてみれば自分自身も体系的に冠詞の指導を受けたことなどない。そういえば、高校の英語の恩師は「ここは各自読んでおくように」とおっしゃって教科書の説明を省かれた。今はそのお気持ちがわからないでもない。

一方、学生にとってはそれほど厄介な問題ではないようだ。メールのハートマークのように、ほぼ直感的に *a* や *the* を文中に放り込んでくる。そんな状況の中で、*the* に関する質問を持ってきた S 子は絶滅危惧種に匹敵する貴重な存在である。なんとか答えてやりたい。

では、最初に確認しますが、*the* とはどんな働きをする語ですか。

えーっ、そんな基本から話すんですか？話し手が特定の物を指していることを表すしるしですよね。たとえば、*the book* と言ったら、「その本」みたいな感じで。

そうですね。ということは、*the Yamato River* という表現は特定の *river* を指していますからこれに *the* をつけることは英語の規則にそった標準的な言い方だということになります。この「*the* + 固有名詞 + 普通名詞」表現は、地名だけでなくさまざまな事柄を表す固有名詞として使われています。*the Meiji era*, *the Osaka Dome*, *the Gion Festival* とかね。

だからあ、なぜ *Osaka Station* には *the* がつかないんですか。これは特定の駅を表す固有名詞じゃないですか。あっ、今気づいたけど、*Osaka City* とか *Osaka Prefecture* とかも *the* がつきませんよね。

そうですね。ほかにも、Awaji Island とか Nakanoshima Park とか Osaka Jogakuin University とかいっぱいあります。えーっと、S子さんは、なぜ the がつくものにつかないものがあるか、それが知りたいんですよね。実は、私も決定的な答えがないのです。

それでは困ります。

そうですね。いろんな考え方ができると思いますが、あえて言えば、一種の「純粹固有名詞化」のようなことが起こっているのだと考えています。

ジュンスイコユーメーシカ？

本来、固有名詞には Osaka, Mary, October のように冠詞はつきませんよね。これに対し、the Yamato River などの「the + 固有名詞 + 普通名詞」の形はやや説明的な表現であって本来の固有名詞ではないんです。いわば、「そのヤマトという川」みたいな感じなんです。

Osaka Station のようなある種の場所や組織を表す表現に the がつかないのは、おそらく、この説明性が薄れて、本来の固有名詞のように意識されるから the がなくなったのだと考えられます。

あ、信用してないようですね。a や the が消えて普通名詞が固有名詞化するというのは、珍しい事ではないですよ。たとえば、mother という語は普通、a mother, my mother, the mother などのように使うでしょう。ところが、家族の間でお母さんのことを話す時には “When is Mother coming back?” のように無冠詞で使えますよね。これってお母さんを表す固有名詞じゃないですか。

ふうん、じゃあ、なぜ、Osaka Station は固有名詞化が進み、the Yamato River は固有名詞化が進まなかったのですか。

えっ？それはその、つまり、具体性とか歴史的慣習とか色々な要素があって、まあ、一概には言えないんですが…

あ、なんだ、よく知らないんだ。先生、また来るから勉強しといてね。

こうしてS子は帰って行った。冠詞の説明はいつも後味が悪い。日本語を母語とする教員がこれを教えることには限界があるとつくづく思う。だが、英語を母語とする教員が英語でこれを説明することも非効率的であろう。結局、論理的、背景的説明はこちら側の仕事

なのだろうなと自分に言い聞かせる。

こうしてはられない。S子はまた、すぐやって来るだろう。今日は、本屋で参考書を買って家路につこう。